

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ⑫ 田宮治

## 鎖となる見事な一戦

上、決して止まらず大藪中を逃げの一手で、逃げ切る先までも全く予想できない。

私は一大決心で、この居残る猛猪と対決して若者たちの目の前で完勝法を見せ、どんな猪との激戦でもこのように戦えば必ず勝てるのだと一目で分かる極めつけの一番を、平成二十三年一月十二日に敢行したのである。

もとより、この作戦の見せどころは、追われ慣れた逃げ一手の猛猪を犬群とともにどこまでも追いつけて、必ずその先で猪を止めさせ、その場で本来の止め猪猟のやり方で堂々と勝負するというグレ猪対策である。

この作戦でなければ、この時期の猪は絶対に獲ることができない。猛猪の逃走範囲は想像を遙かに超えた広大なものである。その

そのためにタツを何人置いたと

ここで、何の役にも立たない。ましてや、何十年もタツを張り通した達人であったとしても、このような状況下の作戦となると理解できな

十分に理解し、見事にやり遂げられるのは、長い間、猪猟に挑戦して犬たちとともに猪を攻め続けている勢子長や、獲ろうと思えば、いつでもこの山でも一人で簡単に猪が獲れる猪猟人に限ると思

しかし、このような劣悪な状況下でのグレ猪や名物猪との戦いになると、いくら達人クラスの實力を持っていても、この作戦を見事に成功させるには、咬み止

め、追い切りが自在の一流犬群があつてのことである。

当然、困った時は犬頼みである。このような状況下で凄い仕事をやり遂げる一流芸の犬群に育てるには、自らが綱引きして山に引き、独自の訓練法で鍛え上げ、自分の猟に合うように進化改良して完成させ、その頑張った先に咲いた見事な大輪である一流犬群なのである。

だからこそ、どんな困難な猪猟でも完勝できると思っている。ちなみに一流猪犬などと簡単に言うてみたところで、実戦を見た猪猟人に感動を与え、生涯に残るような一流芸域に仕上げるのには、まず自分の猟法と訓練法を信じた上で、犬たちを信じ、日頃から頑張る以外にないのである。どんなに天性の猟能があろうと、何も手

をかけずに名犬をただ待つだけでは、一流猪犬などできようはずもない。

どんな理想論を展開しても、「いざ鎌倉」という、猪猟の緊急時に頼りになって使える犬たちを仕上げるには何の足しにもならないのである。天性の猟能で自然に出来る猪芸くらいでは、私の押し進めたい猪猟の極致はとても完

成できないと思っている。前述のように、何度も繰り返し、独断で猪犬の仕上げ法を解説しているまでのことである。

理想や想像だけで、努力もせず一流猪犬が見事に完成する天性の猟能の犬がいる……そんな夢の逸材がいれば、困難な猪猟道も楽しんで広がるだろうが、残念ながら私の猪猟道にはそんな甘く、いい加減な訓練法は存在しなかった。



獲れた猪に余裕の笑顔（北嶋氏）。犬たちに「ありがとう」と繰り返し言っている。一流猪獵人はこうでなければ……

猪獵完成や名犬仕上げは、どこまで登り詰めようと、人それぞれである。

しかし、忘れてはならない大事なことは、他人は他人で、あくまで自分には自分の道がある。

つまり個性をもって押し進めるべきなのである。

そのことが人真似ではない、自分流となる猪獵道の完成への道順である。自分に合った独自の猪犬群や猪獵法を編み出す決め手となるのである。

したがって、その近道でも空想や理想論として楽して仕上がる名犬論など、差し挟む余地はない。

そこにある完成の秘策となるものは、努力と頑張りであり、根性と汗まみれで毎日実行する犬様とお付き合いだけである。

私は五十五年の獵歴と人生をかけて作り育てた一〇〇頭以上のお犬様とともに、さらなる猪獵の分野を切り拓いていきたいと思っている。

今日の一戦を、新しい世界に分け入り見事完成することで、若者たち、そして次世代までもつなげていく大事な戦いと位置づけ、山彦犬舎の中で抜群の一芸を誇る一群七頭を引き連れての決戦である。

## 一流猪犬の全く新しい戦法

今日の一戦は、この犬群でなければ絶対に成功できないグレ猪が相手である。凄い芸域となつている犬群自慢の実力を限界まで爆発させ、どこまでも追い詰めて、必ずその先で猪を止め切る見事な猪止め現場を再現し、北嶋氏には止め猪獵の総仕上げを体験してもらいたいと思っている。

私はやっと巡ってきたこのチャンスに、猪獵に懸けてきた生涯の執念をぶつけて勝負に出たのである。八方塞がりな苦戦の中にあつても、犬群はめきめきと実力を発揮して、素晴らしい実績を上げていく。

まさにこの機の実戦にふさわしい作戦であり、内容はどんなに最悪の状況下であっても、タツなどに頼らず、あくまでも二人だけで戦い、確実に勝ちに結びつける戦術を覚えてもらうためである。

さらに、極限の挑戦で頂点に立つ戦いなので、並の猪では上達は望めない。すべての思いを、居残

っている攻めづらいメス猪に的を絞ることである。

北嶋氏には、よく見て連絡を密にとり、車で先回りして逃げる猪を迎え撃つように伝えていた。

逃げ一手の攻めづらい猪を、車で道を突っ走り先回りして止め現場に分け入って、止め猪と本来の決戦をする。この作戦は前記のとおり、全く新しい戦い方である。

それはGPSがなく、トランシーバーを頼りに追いかけていた、これまでの獵法をがらりと変えるものである。

GPSは山彦会でも今獵期から取り入れた文明の利器であり、二人くらいで、グループ獵人の何十人分かの獵力を簡単にしのぐ働きをする。

その上、使役犬が猪を止め切る一流猪止め犬群であるため、どんなに逃げ上手な猪でも、猪を追う犬群に主人が付いて追いついていれば、必ずその先で猪をがっちり止めるのである。

この獵法のポイントは、主人が犬たちの後をどこまでも追いつけることで、犬たちも安心して猪を



大物でも必ず止めるので2、3mくらいから撃ち込むのであるが、くれぐれも犬たちを撃たないこと。少し離れると犬たちの動きは凄い速さである。落ち着いて絶対に動きが止まるその時を狙うことである。泡を食って成功したのはビール会社の社長だけだ

止めるまで追うのである。逆に主人が犬たちを追わずに途中で猪を止めるのを待っていると、藪中を突っ走る猪を止め切れず、犬たちを引き離して遠方まで逃げてしま



千葉の山は低いが、このとおりの大藪である。今回の鎖の一戦はこの峰筋の小道を通過して狩ったのである。右下は恐ろしいほどの篠竹の大藪で、猪はよく止まるが、寄り付くのは至難の技である。元気で連絡に顔を出したシロ号。この後すぐ鳴き出す。この日の戦いはここから始まった

成長しても、どこまでも猪を追うものではない。このような逃げ上手な猪であっても、グループ猟で使役する追い犬なら猪に離されようが、主人が付いて来なくとも、どこまでも追ってタツに嵌め込むのが一流芸である。

しかし、猪止め犬は一流芸になればなるほど、地鼻(地面に残る猪の足跡の臭いを嗅ぐ仕種)を使わず、猪の体臭によって寝屋起こしや、猪を発見する。そして、沢下から上って来る臭気によったり、猪の付近に漂う臭気を高鼻で嗅ぎ分けて寄り付くのである。そのため、風の強い日や遠くまで追うのは苦手であり、よほどこだわって鍛錬しなければ一流猪止め犬群であっても、この作戦はできない。

つまり一流猪止め犬は、主人から決して離れず、手の届く所で猪を止めるからこそ、一人でも猪が獲れるのである。しかし、その一流芸の猪止め犬群を追い犬みたいにどこまでも猪を追うように進化改良の鍛錬をして、その先で本来の止め芸を必ず

実現して、堂々と勝負しようというのである。

どこまでも追い詰めてタツで迎え撃つのと、追い詰めて止め置く猪に勢子の主人が寄り付いて撃つことが重要なのである。この決めの手の相違が大変なのは当たり前のことである。問題は二人だけでグレ猪を撃ち獲るとなれば、この作戦の決め手は、必ず猪を止めるところにあるので、一流猪止め犬群でなければ絶対に実践できないのである。

そして、二人だけの猪猟では、どんな悪条件だろうと、最終的にはきっちり猪を止め置く一流猪犬群でなければ勝負にならない。

### 広大無辺な大作戦

今日の犬群は追いも咬みも自在のヨシ号、シロ号、マロ号である。この犬群ならどんな大物やグレ猪でもビクともしない。絶対の自信をもって広大無辺な大作戦を胸に秘め必勝を祈る心境で、前を走る北嶋氏の軽トラの後を追った。この猟場は猪を獲り過ぎて少な

くなっているのと、大藪続きで狩りにくいので、既に九時を過ぎているのに誰も入って来ない。

突然、北嶋氏が車を止め、いつもの猪の渡りを見切っている。「動いていないなあ」と、私を見るので、「大丈夫だ。あそこには必ず入っているよ」と、大声で元気つける。必ず勝ちに行く覚悟でいると、こんな無謀な作戦でも天は味方してくれるようで、快晴にして無風である。

静かな大杉林の中を登っている七曲がりのつづら坂に差ししかかった。大杉林に差し込む日差しで上下の山容を注意して眺めながら登り、あと一つ曲がれば頂上という所で突然、犬たちが鳴き出した。前も同じように鳴き出したことがあった。その時は坂の上から左側に広がる大峰筋に猪がいたが、今日の鳴きは右上に広がる目的地の大篠藪のようだ。まるで探知犬さながらで、「猪がいるぞ。早く放せ！」というようにワンワンと一斉に鳴いている。「よしよし猪は近いぞ！ これまた天の助け」と、元氣百倍、ルンルン気分で一

気に七曲がりを登り切り、その上の広くなった道端に車を止めた。

逸る気持ちを抑え、急いで猟支度をして犬たちにGPSを付け、その場から放した。マロ号を先頭に、ヨシ号とシロ号が大峰筋の細い小道をぶっ飛び、姿を消した。猪猟では、この瞬間の別れが愛犬たちとの最後となるかもしれないので、必ず私は「それ、行って来い！」と、無事帰って来ることを願って放している。

事実、今日のような逃げ慣れた猛猪の場合は、猪運はすべて犬たち任せである。したがって、常日頃から犬群を鍛え上げ、戦う相手と考えたバック犬群を選んで、必ず無傷で勝つことを第一に考えて作戦を立てなければならぬ。

この気持ちを北嶋氏に伝えたくて、「猪は必ずこの篠原にいるが、多分、止まらずぶっ飛ぶだろうから、少し峰筋の小道を進み様子を见ましようや」と、篠竹で覆われた小道を少しづつ静かに歩いて行った。

右側の眼下には、小沢を挟んだ両側の山肌一〇〇メートルくらいがすべ

て篠藪の絶景が遙か彼方まで続いている。この藪を二年前に初めて見た時、今日のように道端に猪跡があり、北嶋氏から「この大藪に必ず猪がいるよ」と教えられた。

私は千葉の山でも珍しい、こんな篠竹の大藪では、犬たちは必ずケガをするので、できれば戦わせたくなかったが、今期は猪が少ないので仕方がない。

何度も大猪と戦い、この大藪に分け入ったが、中に入ると身動きもできない恐ろしい所なのだ。必ず猪は止まるが、前方が全く見えないので、いつも寸前で逃げられている難猟場である。犬たちはそんな猟場をもとめせず、一直線に、いつも猪が寝ている篠竹に覆われた日当たりの良い小峰の先端にどんどんと近づいている。

「北嶋さん、出ますよ」と、GPSを片手に犬たちの進路を見てみると、ワンワンワン、ウーッワンと鳴き出した。静けさを突き破るマロ号の凄腕威嚇である。

次いで、ヨシ号とシロ号も負けじと吠え立てる。「出たぞ！ 北嶋さん」と立ち止まり、様子を見

ていると、犬たちがすぐに動き出した。車から放してまだ五分も経っていないのに、七曲がりの坂のちようど上辺りで猪臭を嗅ぎ当て、一直線に寝屋を突き止め、必死で射殺めようとしている。やはり居残った猪があり、凄腕勢いでバリバリと逃がっている。

こんな大藪の、圧倒的に猪が有利な場所では止まらないのだから大物ではない。大物で犬たちに攻撃して来たらしめたもの。この犬群ならばこの大藪でも何度も激戦を経験しているが、一度も負けていないし、ケガもない。これは思ったとおりの逃げ一手の（七、八〇）手練と見た。

私は北嶋氏に「すぐ車に戻って七曲がりを下り、登って来た時に見切っていたあの渡り辺りに飛んでくれ！ 今日ほどこまでも私は犬たちを追うから、連絡は取りづらくなる。連絡はいいから、どこまでもGPSを頼りに犬たちの行く方向をよく見て、先回りしてくれ」と告げた。北嶋氏は元氣に「分かった。行きます！」とぶっ飛んで行った。（つづく）